



エコ・アクションの価値を伝え、社会と共有
「い・ろ・は・す」が取り組む

リサイクル・アートプロジェクト

RECYCLE ART PROJECT

「しぼる」というアクションでPETボトルを小さくつぶせる日本の天然水ブランド「い・ろ・は・す」。これまで身近で簡単にできるエコ・アクションを提案してきたが、飲用後のPETボトルを素材にして新たな価値を持つアイテムを生み出す「リサイクル・アートプロジェクト」をスタート。この取り組みを環境ジャーナリスト・枝廣淳子氏が見つめた。



楽しさや気持ちよさを環境配慮をワガコト化する

「い・ろ・は・す」は2009年の誕生当初から、しぼれる軽量ボトルで消費者が楽しく積極的にエコアクションに参加できることを魅力として打ち出した、画期的な製品だ。2010年からは、植物由来の素材を一部に使用したプラントボトルを採用して、石油依存の低減に努めているほか、2012年からは売り上げの一部を全国47都道府県の水資源を守る活動に寄付するなど、さまざまな環境配慮の取り組みを続けている。

「い・ろ・は・す」は天然水を届けるための環境負荷を減らすとともに、それにより中身の美味しい天然

然水を守るという2つのアプローチで取り組んでおり、環境配慮の両輪が回っているという印象を受けます」と枝廣氏は話す。製品の価値にとつて「付け足し」になりがちだった環境の要素を、第一の価値に転換させた功績は大きいと同氏は評価する。

「環境配慮に関しては、リサイクルしなければならぬ、節電しなければならぬなど、ねばならない」というコミュニケーションがほとんどです。ところが、ねばならないを動機に実際に行動できる人はごく一部で、大半の人はその必要性をワガコト化することはできません。ワガコト化に有効なのが、楽しさや面白さ、気持ちよさといった、快の創出。ねばならないの提案は典型的な左脳的なコミュニケーションですが、飲み終えたボトルをキユツとしぼる、快の提案は右脳的であり、直感に訴えかける上手なコミュニケーションだといえます」

「い・ろ・は・す」が提案する「リサイクル・アートプロジェクト」も、リサイクルという言葉のどこか硬いイメージを一変させる、楽しさや面白さを感じられる試みだ。回収したPETボトルを素材として、新たな価値を持ったアイテムに生まれかわらせる。実はこれまでも、アジアゾウなど絶滅の危機に

にすることにより、エコアクションの価値を社会と共有しながら直感的に認識できます(枝廣氏)



枝廣 淳子氏
環境ジャーナリスト
幸せ経済社会研究所所長

環境問題に関する講演、執筆、翻訳などの活動を展開。「つながり」と「対話」でしなやかに強く、幸せな未来の共創をめざす。http://www.es-inc.jp/

瀕する動物をモチーフにしたアート作品や、巨大なボトルツリー(木)などを制作しさまざまなメッセージを発信している。今回も、作品を通じてPETボトルの資源としての価値を見つめ直してもらい、「い・ろ・は・す」の「飲んで、しぼって、リサイクル」のアクションが環境貢献につながっていることを実感してもらおうが狙いだ。

「PETボトルを回収ボックスに入れるだけでは、生活者はそのエコアクションの価値を実感できません。しかし、みんなの力が集まって生まれたアート作品を他者と一緒に目

ボトルアート制作過程

「い・ろ・は・す」の飲用後のPETボトルを素材に、各デザイナーの自由な発想で制作が進められた。いずれも思い思いの手法がとられているがシャンデリアは、しぼり方の違いによって素材の光り具合や印象が変化することをうまく利用した繊細な作品となった。



renketsu 連結

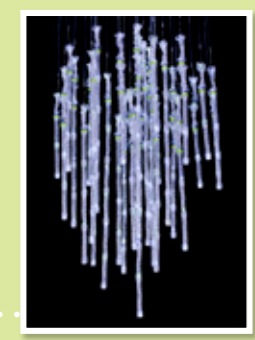
tsutsumu 包む

shiboru しぼる

環境貢献へ向けた取り組み

リサイクル・アートプロジェクト

「い・ろ・は・す リサイクル・アートプロジェクト」では、国内の気鋭のデザイナーたちがボトルアートを制作した。インテリアや遊びなどに使える、実用性の高い下記の3つのモチーフが完成した。このプロジェクトの詳細は、「い・ろ・は・す」のホームページ(<http://i-lohas.jp>)でも紹介されている。



「い・ろ・は・す」のしぼりやすいデザインを活かして、究極にしぼられた形を作った。PETボトルを透明な美しい素材の単位として捉え、美しさを楽しめる作品に仕上げた。

【シャンデリア】

制作：トラフ建築設計事務所

建築設計、インテリア、プロダクトデザイン、空間インスタレーションやムービー制作への参加など多岐にわたって取り組む。「光の織機(Canon Milano Salone 2011)」は最優秀賞に輝いた。



組み合わせ次第で多彩な用途の物体に変化するPETボトルの可能性を、基本の形で表現。ボトルの底面をうまく利用し、肌に触れる面の柔らかさにも配慮した。

【ソファ】

制作：織咲誠氏

自然力を取り込む知恵、物質量やコストに頼らず利を得るクリエイティブを実践。デザインは世界で特許登録され、数々の製品として世に出つつある。



ボールはしぼっていないPETボトルを連結して球体に成形。転がすことによる形状の変化も楽しむ。ピンはしぼったボトルを粘土のようにくっつけて造形していった。

【ボウリング】

制作：リバープロジェクト(本多恵三郎氏)

家具、プロダクトなどのデザイン作品を国内外で発表。2011年、各国のELLE DÉCOR編集長が選ぶYoung Talent of the Yearに。2008年リバープロジェクト参加。

たくさん入り口を用意し環境活動を大きなうねりに

「楽しさ、面白さ、美しさを持ったアート作品につくり上げることには、人々のモノの見方を柔らかにするのにも効果的です。特に今回のように、実用性が高く、遊び心が付加された作品を目にすれば、PETボトルは資源であるという理解は深まるはず」と枝廣氏は続ける。同氏が環境問題の改善に取り組むなかで重視しているのが「伝えること、つなげること」。活動がうねりとなるためには、伝える、つなげるというコミュニケーションが不可欠であり、その入り口はできるだけ多く用意する必要があると話す。

「例えば、PETボトル何本分が卵パック何個分にリサイクルされるといった論理的データもメッセージの1つ。しかし、そのメッセージに反応できなかった人を置いてきぼりにしては、大きなうねりは生まれません。これまでメッセージが響かなかった人にもさまざまな入り口を用意して参加を促し、広く厚みのある環境活動に育てていくことが大切です。その点では環境ブランドを確立した「い・ろ・は・す」が、一貫した活動としてリサイクル・アートプロジェクトに取り組んでい

ることは、大きな意味を持っていると思います」

今回、作品制作に携わったリバープロジェクトの本多恵三郎氏は、作品制作がリサイクル行為の視覚化の役割を果たしたと話す。同氏によるボウリングピンには1本あたり500〜600本のPETボトルが使われている。

「ボトルを1本1本組み合わせることで、新たな価値が生まれる過程を楽しみました。リサイクルは楽しいものというメッセージにもつながったのでは」(本多氏)

「しぼる(つぶす)」という一定のルールが、PETボトルの素材としての可能性を高めていると話すのは織咲誠氏だ。

「しぼることでボトルが規格化され、可能性のある形になる。そして、新しい価値が生まれ、つながりが生まれていく。この感覚は今の時代が求めているものだ」と改めて気づかされました(織咲氏)

枝廣氏は同プロジェクトを含む「い・ろ・は・す」の環境活動を評価しつつ、さらなる期待を寄せている。

「業界のトップランナーとして、他社がまねせざるを得ないような環境活動に率先して取り組んでほしい。環境問題の解決に向けて、社会の価値観を変え、文化をつくっていく。コカ・コーラはそんな大きな影響力を持った企業だと認識しています」(枝廣氏)

※5〜30%